第３回諏訪東京理科大学公立化等検討有識者会議　会議録

開　催　日　時	平成２８年8月３日（水）　１３時３０分 ～ １５時３０分		
開　催　場　所	茅野市役所　８階 大ホール		
出　席　者　数	２２人		
欠　席　者　数	８人		
公開・非公開の別	公開 ・ 非公開	傍 聴 者 の 数	０人

会議結果

協議内容・発言内容（概要）

【会議の内容】

１　開会
２　あいさつ
３　報告事項
（１）第２回諏訪東京理科大学公立化等検討有識者会議の結果について（資料１）
（２）第３回～第６回諏訪東京理科大学公立化等検討協議会の結果について（資料２－１～４）
（３）新公立大学の学部・学科構成について（資料３－１～３）
４　協議事項
（１）魅力ある大学にするための方策について（資料４―１～２）
５　その他
６　閉会

■ 報告事項についての有識者会議の意見

・今年度の新入生の状況はどうか。

⇒(事務局)公立化することが伝わり、工学部は200名の定員を確保することができ、経営情報学部はこれまでは定員の半分に満たなかったが、入学定員の半分を超えることができた。また、オープンキャンパスの来場者も、昨年度と比べて２、３割増えている。最近の入学者数の動向としては、昨年度は214人、今年度は259人となっている。

・ここ最近の大きな流れとして、少子化により学生数が減り学生確保の競争が激化していく中で、学部を増やし単科大学を総合大学化するケースが増えてきている。

・長野県が実施したアンケートでも、確かに工学系の学部・学科の人気があるということであるが、今回、工学部に一本化する中で、マネジメント系の学問を工学部の中に取り入れるとはいえ、それはあくまで理系の学生を対象にマネジメント教育をするということであり、文系の学生に対し募集をやめることになる。

⇒(事務局)長野県全体で見ると、マネジメント系の学部は増える方向にある。その中で、諏訪東京理科大学は「理科大学」としての特徴を出していくことが大事だと考えている。しかし、ただ「ものづくり」というだけではなく、例えば女子学生にも入学してもらいやすいよう情報系を加えたりし、できるだけ幅を広げた方が良いと考え、今の形を提案している。

・ネットなどをうまく利用していくと、施設面に大きな負担をかけずにサテライトキャンパスのようなことを行っていくことができると思う。

⇒(事務局)例えば、ネットを利用しいくつかの科目が取れるようになったり、ネットだけの大学もあったりするが、諏訪東京理科大学においては、教員と学生が一緒に対面で研究をすることによって学生の力がつき、また、学生相互間でも力をつけていくことができると考えている。しかし、例えば社会人の方も大学で勉強する機会を増やすこともできるので、いくつかの単位についてはネットを利用し単位を取れるような仕組みも検討していきたい。

・奨学金について、できれば給付型のものを検討してもらいたい。例えば、地域との連携といった意味では地域枠のようなものを設けてもよいし、あるいは遠隔地対象のものを作り遠隔地の学生を呼び寄せる、といったことも可能ではないかと思う。

⇒(事務局)一般的に奨学金の前段階として授業料の免除制度がある。諏訪東京理科大学においては、緊

急対応は可能であるが、免除をすることはできず、中には授業料の支払いが困難で退学をせざるを得ない学生もいる。私立大学に対し公立大学では、学費の免除というのはある程度認められており、これも公立化を目指す一つの理由である。そして、授業料の免除とは別に、生活費を出すということがさらに出来ればよいと思う。現在でも学生支援機構をはじめ様々な奨学金があり、それと合わせて地元からこういった部分に対してもご協力をいただければありがたいと思う。

・単科大学になるということは、とても可能性が出てくると思う。とがった特徴をどれだけこの公立大学が出せるか、それが魅力につながると思う。
・ハーバード大学は４兆円の予算をもって経営が出来ているというが、それは優秀な学生が大学に集まり、研究・開発し、市場に出ていきお金を生み出す、という仕組みが出来ているのだと思う。大学の学生と産業がうまく結びついているので、様々な資金の集め方ができているのだと思う。
・人にしかできないと思っていた内容を、ある頭脳があると、それを自動化して効率化を図り、採算性を出していくことができる。そういったものを作り出すためには、専門的知識と幅広く開発をしていく技術が無いとできないと思う。
・地元の製造業としては、諏訪東京理科大学が諏訪の地にあることの恩恵を受けたいと思っている。その恩恵の一番のメリットは、優秀な頭脳がそこに集まるということだと思う。
・例えば、講師の先生の給料を一部負担し、優秀な頭脳をいただくかわりに、地元企業の基礎技術やこれから入ってくるテーマを大学に持ち帰ってもらい、次に向けた技術として研究し、その結果を企業へ持ち帰っていただくという形が出来れば、企業としてはなかなか採用のできない優秀な頭脳を、一定額の人件費を負担することにより確保することができるし、大学としても地元企業にある様々な項目を持ち帰り、次の研究課題にしていくといった取組ができると思う。
⇒(事務局) この大学の構想として、新しい技術による生産性の向上や、IT ロボットやネットを利用した受注管理など、それらを実現していくために、機械電気工学科や情報応用工学科を設けた。また、地域企業との連携については、地域連携センターなどの部門で行っていきたいと考えている。例えば、学部生や大学院生が企業と共同研究をすることによって、その企業に関心を持ちそこへ就職するケースも多い。地元とより密着した大学を目指していきたいと思う。

■ 協議事項（１）「魅力ある大学にするための方策について」 の有識者会議の意見

・諏訪地域をはじめ長野県全体に、優秀で憧れる企業がたくさんある中で、例えば、諏訪東京理科大学をある一定以上の成績で卒業すると、そういった優秀な企業に優先的に入社できる、といったシステムを作ることもできると思う。
・インターンシップを単位にし、企業でも個々の能力を見極めてもらうという取組をすることも大切だと思う。
・様々な取組を通して、大学に入学してくる学生のレベルが上がり、そして就職先のレベルが上がっていく。このような好循環を何とか見つけていかなければならない。
・地元の高校生が、どうしたら公立化した諏訪東京理科大学へ志願してくれるか聞いてみるべきだと思う。例えば、駅から大学の距離や、バスなどの通学方法、クラブ活動の状況など、もっと単純な部分についても聞いてみても良いと思う。
・インターンシップの段階で、海外を見るということも非常に大事であると思う。
・技術革新が飛躍的な現代においては、電気機械的な部分だけでなく材料問題にも強い、そういった複合的な学生を養成していくべきであると思う。
・単科大学になることについては、ものすごく魅力を出せる可能性があるものであり、今まで出てきた様々な意見をどこまで具現化できるかというところにかかってくると思う。
・工学と経営学の融合という部分については、想像していた以上に具体的な内容で検討されてきている。また、大学の内容としては、インターンシップ、産学官連携など広く入った内容になっており、方向性が明確になってきた。
・学部生や大学院生もそうであるが、卒業研究などを一緒にやっている中で、卒業論文や修士論文で研究したことが、入社後すぐに実務に直接活かせるということで大変役に立っている。
・これまでに出てきた意見をできる限り具現化していき、大学の魅力づくりにつなげてほしい。

・なぜ募集で人が来ないのかという部分を明確化し、その部分にポイントを絞っていかなければならないと思う。
・魅力ある大学を作っていく中で、学生も魅力ある学生になっていき、そういう学生を増やしていくことが重要であると思う。大学が魅力的であって、そこにいる学生が魅力的でなければならない。また、「この人は、どこの大学の人だろう」というような見方をすることもあり、そうなった時に「諏訪東京理科大学出身の人はすごい」といえる学生が、どれだけいるかというのも一つポイントになってくると思う。
・これまで継続してやってきた取組が、どれだけ成果があって続けていく価値があるのか、そして、それらをどのようにアピールしていけば学生募集につながるか、そういった部分を考えていかなければならないと思う。
・今回の大学の構想では、マネジメントの部分も一緒に教育し、若い経営者を育てていくようになっている。製造業を経営していくというのは、工業関係の知識・ノウハウ・技術力がないと、なかなか将来的な方向にしっかりと導いていくことが出来ないと思う。
・デザインという部分も必要になってくる。新しい製品ができるときにもデザイン性によって大きく変わってくる。例えば、美術関係の学校とも連携をとっていくなど、特色のある学校経営をしていければと思う。
・先進農業エネルギー理工学研究部門のキックオフ会や、農業生産と両立できる太陽光発電装置などが報道されていたが、諏訪地域の特色として農業があり、こういったものは魅力ある大学づくりに繋がっていくと思う。今後もこういった取組を積極的にPRしていくことが大事であると思う。